

モテットBWV226の歌詞についての一考察(2)

細かいことだが第1曲最後の歌詞 mit unaussprechlichem Seufzen (新共同訳: 言葉に表せないうめきをもって)の前にある aufs beste (auf das beste の短縮語)にも言及してみたい。この成句は「極めて良く・最善に (on the best way)」という意味で使用される副詞句であるが、これに当る言葉は日本語の口語訳・共同訳・新共同訳の聖書のどこにも見当たらない。ルター訳ドイツ語聖書では、筆者所有の1984年改訂版には同様に全くなく、その代わりに1522年版・1534年版には mächtig (力強く)、1546年版には gewaltig (強力に)が使われており、aufs beste があるのは1545年版(1912年改訂版)だけで、バッハはこの版を採用したものと思われる。ルターの新約聖書のドイツ語訳はギリシャ語の原文には当たりつつも、学問的な翻訳ではなく民衆の理解を容易にするために必要に応じて言い換えている箇所があるという(徳善義和著「マルティン・ルター」岩波新書)。これからしてこの語句は原典にはなかったかもしれないが、歌詞として存在する以上は無視するわけにもいかず、「御霊みずからがこの上ない形で執り成して下さるのだから、言葉にならないうめき声もて(藤原一広)」や「霊自ら私たちのために執り成して下さる、言葉に表せぬうめきという、この上ないやりかたで(磯山雅)」という対訳がある。「この上ない」は訳として立派だが、後者のうめきの修飾語とするのは訳しすぎで、「執り成す」そのものに掛ける方が自然と思われる。

ここで第1曲の聖句についてプロテスタントの神学者・牧師の解釈を紹介してみたい(主として竹森満佐一「ローマ書講解説教」から)。すなわち「私たちの弱さという言葉は、人間の弱さや愚かさのことには違いないが、救いを受けていない人間の弱さではなくて、すでに信仰生活をしている者の弱さである。霊とは聖霊すなわちイエスの霊であり、私たちがどう祈っていいかわからなくなる時、神を心から信頼できなくなる時、霊自らが私たちの弱さに入り込んで、一緒になってうめきながら、神に執り成して下さる存在である。霊のうめきは決してただ言葉にならないある声ではなく、うめくというほかはないような嘆きであり、祈ることも知らずに、救われたことを十分に感謝もしないでいる人間のために神に執り成すには、一切をわきまえている霊ですら、流暢な言葉にはしえず、一層大きなうめきになったに違いない。イエスは罪人のために執り成すために十字架にかけられ、霊がまた言葉に表せないうめきをもって執り成して下さるのは、主イエスのことを思うにつけても、無限の慰めと感動とを与えてくれる。」というのである。

第2曲の Alla breve (2/2拍子)で始まる冒頭の歌詞 Der aber die Herzen forschet, der weiß, was des Geistes Sinn sei (新共同訳: 人の心を見抜く方は、霊の思いがなんであるかを知っておられます)の主語は「神」であることは疑いのないところである。die Herzen は中性名詞 das Herz の複数で Herz は肉体的には「心臓」、精神的には「心」を意味し、複数であれば「人々の心」を指す。Geistes Sinn のSinn (感覚・考え: 英 sense) は内容的に難しい言葉だが、先に紹介したドイツ語の統一訳聖書では die Absicht des Geistes (霊の意図)として明確な表現を用いている。

次の denn er vertritt (なぜなら彼は執り成す)の代名詞 er (彼)は前の文章の男性名詞 Geist を

受けている。唯一の存在である Gott は無冠詞で使用されることが多く、er で受ける例は少なく、内容的にも当然である。問題は次の die Heiligen(聖者たち:英 the saints)。これが殉教者や教会により崇敬され列聖された聖職者である「聖人」だとしたら、むしろ「執り成す」側に立つべき人々であるが、パウロがロマ書で言っている「聖なる者たち」は「イエスにより神の子となった人々」すなわち「キリスト教徒」を指すとされている。霊が彼らのために神の御心のままに執り成しの役割を果たしているということであろう。ここで不思議なのはバッハが何故この言葉にメリスマを使用したのか、それにより特別の意味を与えたかったのかどうかということである。すなわち第2曲で一番の装飾音はこの die Heiligen に与えられているからである。これに対し日本語としては「霊」とともに「執り成す」という言葉が最も重要視すべきであると思われるが、ドイツ語の vertritt という歌詞は第1曲では Seufzen と比べてわりとおとなしい扱いしか受けていない。しかしさすがに第2曲では各パート10回以上繰り返し歌うようになっており、主題の1つとして考えられているのであろう。

このモテット2番は6曲のモテットのうち唯一成立時期がはっきりしているもので、1729年10月ライプツィヒのトーマス学校長エルネスティ(バッハの上司)の埋葬式にあたって作曲された。エルネスティは亡くなるずっと前から遺言でロマ書のこの2節の聖句を埋葬式の説教で用いることを指定していた。この聖書の部分は悲しみではなく信頼を主題としており、バッハの音楽もこの考えに従って作曲されたとのこと(バッハ・コレギウム・ジャパンのモテット全曲演奏のプログラムから引用)。



自筆総譜冒頭「二重合唱によるモテット 故エルネスティ教授・校長の埋葬式に J.S.Bach」の注記がある。

なお you tube でこの自筆譜によるガーディナーの演奏が聴けるので興味がある方はトライしてみてください

【後記】

今回はバッハが採用し作曲した歌詞と、実際のルター訳ドイツ語聖書や日本語の各種の聖書の聖句との微妙な差異、神学者の解釈などを取り上げてみました。一つ一つの言葉にどんな意味を見出すべきか、どんな思いで歌うべきかの参考に少しでも役立てれば幸いです。(T 山田武)